

女川原発が「被災原発」だという問題

東日本大震災後の女川原発2号機の剛性の状況

東北電力の資料による

ひびの数
計1130

ひびの数
計1130

建屋上部(3階) 734
剛性70%低下

燃料交換用のクレーン

使用済み燃料プール

原子炉



剛性は建物の設計の指標の一つで、地震など外部からの力に対する変形のにしさを表す。

東北電によると、女川2

号機では2011年の東日本大震災で、607ガル(ガルは揺れの勢いを示す単位)の揺れが観測された。それまで想定されていた揺れは最大で594ガルだった。

その後の調査で、原子炉建屋の壁に1130カ所のひびが見つかった。ひびは揺れが大きくなる建屋上部ほど多く、3階に734カ所が集中していた。また、大震災後の余震で観測された建屋下部と上部の揺れ方の違いから、建屋の3階より上部の剛性は、完成時より70%下がったとの解析結果が出たという。2階から地下3階も25%減った。

東北電は剛性が下がって

女川原発建屋ひび1130

2号機 上部の剛性、7割減

東北電力は17日、東日本大震災で被災した女川原発2号機(宮城県)で、原子炉建屋の壁に1130カ所のひびが確認され、建屋上部は剛性が完成直後と比べて7割下がったとの解析結果を、再稼働に向けた原子力規制委員会の審査会で示した。東北電は、耐震工事を進めて新規制基準への適合を目指す方針だが、規制委は、ひびの状況や工事方法などを確認する必要があり、審査が長引くのは必至だ。

ひびは建物上部の剛性を低下させ、地震時の揺れを増大させる恐れがある。東北電は、ひびの状況や工事方法などを確認する必要があり、審査が長引くのは必至だ。

いしても新基準に適合できるように今後、建屋の耐震性を大幅に高める工事を進める方針だ。(杉本崇、東山正宣)